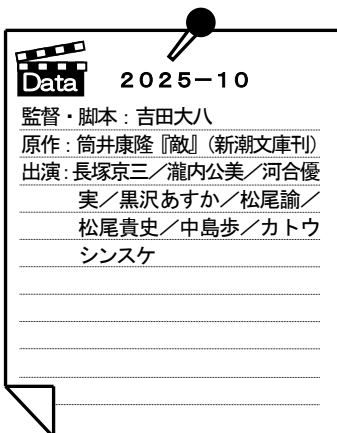




## みどころ

本作は吉田大八監督が筒井康隆の原作を映画化したものだが、「敵」とは一体ダレ? 「老人文学の最高峰」と呼ばれている原作をそんなタイトルとしたのは一体なぜ? 原作では 75 歳、本作映画では 77 歳に設定された元大学教授、渡辺儀助役を演じるのは、俳優歴 50 年の長塚京三。こりゃ弁護士歴 50 年を終え、1/26 に 76 歳の誕生日を迎えたばかりの私には必見!

導入部に見る「儀助のグルメ」風景の連続にはビックリだが、私の大好きな女優・瀧内公美扮する元教え子の靖子が自宅を訪れるあたりからスケベ心が刺激されるとともに、「敵」がある日突然現れてくことに・・・。

本作では何よりも、20 年前に妻を亡くし、都心の庭付き戸建て住宅で一人暮らしをする儀助の人生観、価値観を把握することが大切。名優・長塚京三はそのことに心血を注ぎ、吉田大八監督はモノクロの映像でそれを強調しているが、フランス近代演劇史を専門にした老人の心の奥底は如何に? 同世代の私としては、それを観察すると共に、自分の「敵」をしっかりと見定めたい。

## ■□■三冠受賞の問題作を満席状態で鑑賞! 原作は? 主演は? ■□■

筒井康隆の同名小説を吉田大八監督が映画化した本作は、2024 年の第 37 回東京国際映画祭で東京グランプリ、最優秀監督賞、最優秀男優賞の三冠を受賞したこともあり、満席。主演は、俳優歴 50 年を迎える長塚京三だ。12 年ぶりの主演だそうだが、私が強く印象に残っているのは、映画評論を書き始める少し前に観た『瀬戸内ムーンライト・セレナーデ』(97 年) と『恋と花火と観覧車』(97 年)。両作での長塚京三は、実にカッコ良い中年男だった。とりわけ後者では、共演した女優・松嶋菜々子の初々しさが格別の魅力だったし、それまで悪役のイメージが強かった長塚京三が同作によって「理想の上司像」を体現する

俳優に脱皮するきっかけになる名作だった。そんな彼が本作では、ほぼ出ずっぱりで 77 歳の独居老人・渡辺儀助役を熱演！

原作は 1998 年に筒井康隆が発表した同名小説で、“現代老人文学の最高峰”と言われていたそうだが、それは一体なぜ？また、『敵』とは何とも物騒なタイトルだが、その意味は？『敵』というタイトルはシンプルでわかりやすいが、なぜ老人文学の最高峰の小説にそんなタイトルがつけられたの？チラシには、『敵』はある日突然現れる。』と書かれているが、その内容はさっぱりわからない。また、映画では渡辺儀助の年齢は 77 歳だが、原作では 75 歳らしい。なぜ、吉田大八監督はそんな変更を加えたの？それはともかく、1/26 をもって 76 歳の誕生日を迎えた私にとって、そんな本作は必見！

## ■□■主人公の日常は？料理へのこだわりに注目！■□■

チラシによると、長塚京三演じる渡辺儀助のキャラクターは次の通りだ。すなわち、

妻に先立たれ、20 年間一人暮らしの元大学教授。77 歳。

捨てきれない煩悩と向かい合いつつも、講演や執筆でわずかな収入を得ながら、人間関係も整理し、遺言書を書き終え、預貯金があと何年持つか、すなわち自身が後何年生きられるかを計算しながら、管理された日常を平穩に送っている。自ら定めた“Xデー”に向かってー。

なおチラシでは、元大学教授とだけ書かれているが、私に言わせれば、専門が「フランス近代演劇史」というところがミソ。そんな分野の大学教授ともなれば、おのずから、そのキャラクターの想像がつこうというものだ。それは、悪くいえば、少しハナにつく、カッコつけたがりの、口だけは達者なインテリ親父？そんな私の予想どおり、彼の日常生活は、食事はもとより、掃除、洗濯、買い物等も全て男手一つで完璧にこなしているからビックリ！とりわけ驚かされるのは、自分が食べる毎日の料理への徹底したこだわりだ。本作導入部では、彼が自分のためだけに作る料理の数々が披露されるので、それに注目！

ちなみに、本作最初の 20 分間は、松重豊の人気番組『孤独のグルメ』を彷彿させる（？）渡辺儀助版の「孤独のグルメ」のオンパレードだし、パンフレットには、「儀助の食卓」の見出しでその詳細が紹介されている。もっとも、この原作は 1998 年に発表されたものだからこそ、そんな日常生活が成り立つもので、2025 年の今なら、「ワタミの宅食」やジャパネットの「グルメ定期便」があるし、スーパーでは一人用のおいしい弁当から一人用のさまざまな鍋料理まで何でも揃っている。したがって、一人で下手な料理をするよりその方がよほどおいしく安くかつ栄養バランスも良いはずだ

## ■□■都心の庭付き戸建て住宅に違和感！遺言書にも違和感！■□■

1998 年ならオーケーでも、2025 年の今では、「こんな時代設定おかしいだろう！」と思うのは、第 1 に儀助が前述したとおり毎日の食事を手作りにしていること。第 2 に、儀助が都心の庭付き、井戸付きの戸建て住宅に住んでいることだ。スクリーン上に見るのは平屋建ての古い木造住宅だが、都心の不動産価格が高騰し、マンションが次々と「億ション」

に化している昨今、本作のような住宅事情の設定は、都市問題を専門にしている弁護士私のには違和感が大きい。ちなみに、本作のような古い木造の戸建て住宅で一人暮らしの上、毎日のように火を扱って料理をしていたら、火事の危険が増大すること間違いなしだ。儀助も妻の生存中は、「都心の戸建て住宅を早く売ってマンション住まいを！」と相談していたそうだが、妻に先立たれた後は、そのままズルズルと今日に至っているらしい。

他方、儀助には子供がいないから、遺言書を書くと言っても、その内容は如何に？ちなみに、遺言書については、導入部でほぼ書き終えたようなシーンがあり、中盤では「敵」が出現する中で「書き終えた」ようだが、弁護士の私には、彼が書いている遺言書の中身についても違和感が強い。法定相続人不在の中、儀助は一体どんな遺言書を書き残したの？

## ■□■元教授のプライドは？儀助の人生観、価値観は？■□■

筒井康隆の原作が“最高の老人文学”と呼ばれているのは、きっとフランス近代演劇史を専門とする元大学教授・儀助が、同世代の老人たちとは異質の際立ったプライドを持ち、彼特有の人生観、価値観を持っているところが面白いためだ。預貯金があと何年持つかを計算しながら、残された時間、日常を管理しながら平穩に生きていくという人生観が独特なら、1回10万円と定めた講演料にこだわり、決して値下げに応じない価値観も独特だ。そこらあたりの彼の人生観と価値観は私とは正反対のものが多く、自分の人生観、価値観へのこだわりという面では私は彼に同感！

ちなみに、彼は自信たっぷりに健康診断の必要性を否定する発言をしていたが、いざ自分が辛いキムチを食べ過ぎて問題を起こすと、たちまち医者に頼りっきりになっているから、私の“見立て”では、彼の人生観、価値観はある意味で張り子の虎？また、女性関係を巡る一見紳士然とした彼の姿を見ていると、実は彼の本質はエロじい・・・？

## ■□■2人の女と幽霊妻に注目！性欲はまだまだ！？■□■

本作には次の3人の女性が登場するので、彼女らに対する儀助の対応に注目！

① 元教え子の鷹司靖子（瀧内公美）。靖子が儀助の自宅をはじめて訪れるシーンは、事前の約束を踏まえた、ごく自然の訪問のようだが、そこで交わされる会話や彼女の雰囲気には少しヤバそうなものがある上、2度目3度目の訪問になると・・・？

② 義助の後輩が教えてくれたバー「夜間飛行」のマスターの姪の菅井歩美（河合優実）。フランス文学を専攻する大学生の彼女は時々バーを手伝っていたが、客としてやって来る儀助と知り合うと、フランス文学の話題を中心に急速にその距離を縮めていくことに。その結果“ある事件”が起きるが、儀助の対応は・・・？

③ 20年前に死に別れた妻の渡辺信子（黒沢あすか）。彼女は「2人でパリに行こう」との夢が実現せず、「私が死んだ後は再婚しないで」と願ったにもかかわらず、儀助が康子と自宅で楽しんでいることに嫉妬して、幽霊になって登場してくるから、アレレ、アレレ。

本作はフィクション映画だが、セリフの面白さという意味では、舞台劇としても十分成り立つものだ。そこで、儀助と2人の女、そして幽霊妻との間で交わされている会話のう

ち、ひとときわ目立つ次のものを指摘しておく、次のとおりだ。

① 靖子に対して、「・・・どうする、泊っていく？」

それに対して、「先生。わたしと、したいの？」

② 歩美に対して、「何か困ってる？僕でよければ、相談乗ろうか。」「君はさ、フランス文学から何を学んだの？」

③ 信子からの、「あなた、フランス文学を教えてたくせに、私のこと一度もパリに連れていってくれなかったわよね。」、2人で湯船につかっている時の、儀助の、「嬉しいなあ。生きてる頃に一度こうしてみたかったけど、君は嫌がったから。」

## ■□■頻尿の他、睡眠中に見る夢の増大も老人特有の症状？■□■

去る 1/20 に第 47 代大統領に就任したトランプ氏の価値基準は、「アメリカ第一」。しかし、現在、大谷翔平選手が大リーグ (MLB) で実現している“アメリカンドリーム”は、必ずしも「アメリカ第一」と直結するものではない。また、日本で有名なクラーク博士の「少年よ、大志を抱け」(Boys, be ambitious) は、アメリカンドリームと同じような意味で、青少年を鼓舞・激励するのに絶好の言葉だ。

このように、「夢」はどちらかというといい意味で使われる言葉だが、睡眠中に見る夢は、何の脈絡もない、ワケのわからない夢もあるし、起きるとべっとり汗をかいている嫌な夢もある。さらに、夢の途中でうなされて、飛び起きてしまう悪夢まである。私は 1 度、夢にうなされて叫び声を上げながらベッドから落ち、右肩を打ったことがあり、その後遺症が今なお残っている。儀助は私と同じようにゆったりしたベッドで寝ているから転落する危険はなさそうだが、本作中盤からスクリーン上に登場する隣家のおじさんと、犬を連れて散歩するお婆さんとの犬の糞をめぐる口喧嘩は現実？それとも、儀助の夢？また、77 歳にして儀助がなお旺盛な性欲を持っていることはさまざまな描写から明らかだが、自宅を訪れた靖子との「・・・どうする、泊っていく？」、「先生。わたしと、したいの？」の会話は現実？それとも儀助の夢？

他方、歩美との前述の会話を経て、儀助は歩美に対して 300 万円の学費の援助をしたようだが、ある日、バー「夜間飛行」が閉店してしまうと同時に、歩美も姿をくらまし、連絡がとれなくなったのは、きっと夢ではなく、現実だ。儀助はデザイナーの友人に「・・・騙されたのかもしれないけど、不思議と腹が立たない。むしろ、そうなるべくしてなったような気もする。」と語っていたが、これは単なる強がり？もしくは自己弁明？それとも、単なるカッコつけ？

老人になると必然的に発生する頻尿の症状と同時に、老人になると、本作のように睡眠中に見る夢が多くなると共に、夢と現実の境界が少しずつわからなくなる症状が出現するが、さて儀助の場合のその程度は？儀助が仕事上で使っているパソコンの画面に、時々不穏な文字が表示されるのは多分現実だが、ある日パソコンの画面全体が不穏な文字で占領されてしまったのは現実？それとも夢？また、犬の糞をめぐって言い争っていたお婆さん

と隣家のおじいさんとの 3 度目の言い争いの場で、儀助が耳にした銃声や、目の前でおばさんが撃たれて倒れてしまったのは現実？それとも夢？

本作後半からは、以上述べたような、これは夢？それとも現実？そんなシーンが次々と登場し、さらに銃声のみならず、空襲の音が聞こえ、儀助の家まで燃え始めたが、やっぱりこれも夢？それとも現実？

## ■□■お楽しみの食事会は、なぜ台無しに？■□■

冒頭にみる儀助の食事作りは、ある意味で自分の価値観に基づく日常生活を営むための義務。しかし、わざわざ自宅を訪れてくる靖子と 2 人だけの夕食をするために料理に精を出すのは、“何かへの期待”という下心（スケベ心）でいっぱいだ。そんな形で実現した 2 人だけの夕食には、もちろんワインも用意されていたが、これは現実？それとも夢？ところが、儀助の期待に反して、乾杯をした途端に玄関のベルが鳴り、出版社の犬丸健悟（カトウシンスケ）が、新たな連載が決まったことを伝えるために押しかけてきたから、アレレ。これは夢？それとも現実？

もっとも、玄関で対応する儀助に代わって、靖子が座る台所に、20 年前に死んでしまった信子が現れてきたのは、明らかに夢だ。そんな信子が、食卓に座っている靖子を前にして、堂々と夫に対して、文句を並べる姿は、あまりカッコ良いものではない。また、そんな信子が勧めるままに、犬丸が厚かましくも食卓につき、料理にパクつき、冷えたビールまで要請する異様な姿は、やっぱり夢？私は、『六月の蛇』（03 年）（『シネマ 3』359 頁）で観た女優・黒沢あすかの魅力にぞっこんだったが、それは 20 年以上も昔のこと。本作に見る幽霊妻・信子を演ずる女優黒沢あすかの演技を、どう評価すればいいのだろうか？

他方、『火口ふたり』（19 年）（『シネマ 45』219 頁）、『由宇子の天秤』（21 年）（『シネマ 50』176 頁）で、私が大いに注目した女優・瀧内公美は、まさに靖子役にピッタリ。瀧内公子は、2/21 に公開される『綺麗な、悪』では、ものすごい悪女役を演じるそうだから、私は今から大いに期待している。そんな靖子と儀助との“絡みのシーン”が、どこまで現実だったのか、夢だったのかを考えると、ひょっとして、そもそも靖子の存在自体が夢だったの？いやいや、それはないだろうが、出番こそ少ないものの、本作でも女優・瀧内公美の魅力が十分に発揮されているので、それをしっかり楽しみたい。

## ■□■敵は北から？儀助の死の原因は？遺言書の内容は？■□■

自ら定めた X デーに向かって平穏な一人暮らしを続けていた（？）儀助が、「敵」の存在を認識したのは、パソコンの画面に表示された「敵がやってくる」の文字からだ。多分これは、夢ではなく現実だろうが、ある日、画面全体を文字が覆ってしまったのは、現実ではなく、きっと夢？また、犬を連れて散歩中のおばさんの銃撃死はきっと夢だし、警報が鳴り響く中での大空襲も、家の消失も、もちろん夢！したがって、儀助の死亡も現実ではなく、きっと夢！？モノクロ画面を強調した吉田大八監督の演出力の巧みさのためか、ラスト近くになると、本作ではそこら辺りが本当にわからなくなってくる。チラシには、『敵』

はある日突然現れる。」「人生は恐ろしく、美しいー」の文字が躍っているが、この敵とは、ひょっとして北からやってきたもの・・・？

本作ラストでは、儀助の死亡後、遺言書が読み上げられ、ただ1人の血族である甥が、都心の家屋敷の遺贈を受ける姿が描かれる。遺言の内容や遺贈を受けることになった甥の困惑ぶりは弁護士としては興味をそそられる内容だが、本作の結末としては、私にはイマイチ。つまり、どこまでが夢で、どこからが現実かをあえてわからなくさせている本作のような映画では、ワケがわからないままで終了させてもいいのだから、儀助の死亡自体が本当かどうかをわからなくしてしまってもよかったのでは？そんな思いもないではないが、筒井康隆の原作をここまで楽しめる映画に演出した吉田大八監督の力量に拍手！

## ■□私の夢と現実の境界は？私の敵は？■□

睡眠中に夢が多くなるのは頻尿と同じく老人特有の症状だが、見る夢の内容は人それぞれの人生がありようによって異なる。20年前に妻に先立たれた儀助がその後、再婚しなかったのは、信子から「私が死んだ後、再婚しないでね」と言われていたためかもしれないが、以降20年間も独身生活を続ける中では、きっと睡眠中に亡き妻の夢を見たこともあったはず。それはそれで当然だが、他方、フランス文学の中には、『エマニエル夫人』(74年)をはじめとするフランス官能文学もあるから、彼が在職中に「フランス近代演劇」で講義していた内容には、かなりエロチックな描写も・・・？すると、卒業後15年以上も経ち、今は37歳の人妻になっている教え子の靖子が、スクリーン上で見るような色気たっぷりのキャリアウーマン(?)に成長しているのは、儀助の薫陶のおかげ？

儀助には、時々家に来て、傷んだ箇所の修理などを手伝ってくれる元教え子の枕島光則(松尾諭)もいたが、儀助にとって、それはそれ。靖子のような美人の教え子が仕事とはいえ、独りで自宅を訪問してくれるのは嬉しいはずだ。すると、たまには靖子を巡る“あらぬ妄想”が、睡眠中に“あらぬ夢”として出現することも・・・？そして、もし夢の中とはいえ、そこで儀助が靖子と“あらぬこと”をしていれば、それに嫉妬した信子が幽霊として現れるのは当然あり得ることだ。

このような形で、儀助が睡眠中に見る夢のどこまでが現実で、どこからが夢かの境界線がわからなくなっていくたのは、私にはよく理解できる。他方、私だって人並みにさまざまな悩み事があり、さまざまな争い事がある。その結果、私が睡眠中に見る夢の中には誰かと言い争っている場面もあり、そこでの議論が白熱すると大声で怒鳴りつけることもある。しかし、そのどこまでが現実でどこからが夢かの境界線がわからなくなると、大声で怒鳴った自分の声で目を覚ますことも。一度は別室で寝ている妻が「うなされていたよ」と言いながら駆けつけてきたこともあったから、そんな夢はかなりやばい。これが進行すれば、私も儀助と同じように、ある日、夢と現実の境界線がわからなくなつたうえ、とんでもない「敵」が現れてくるかも。もともと、私の場合、どんな敵になるのかが自分でもわからないから、それは半分楽しみだが・・・。

2025(令和7)年1月30日記